

# 優勝の原動力 「気持ちの強さ」と「積極性」



## 軟式野球部が 第46回全日本学生選手権で4年ぶり4度目 V マネジャーが語る熱い思い

「HAKUMON Chuo」学生記者 影原風音（文3）

軟式野球部が第46回全日本学生選手権大会（8月26～29日、東京都八王子市）で4年ぶり4度目の優勝を飾った。広島修道大との顔合わせでシーソーゲームとなった決勝は、中大が五回に再逆転に成功、1回戦から4連投の牧温人投手（法2）が相手の反撃をしのぎ切り5－3で勝利した。牧投手は最高殊勲選手賞(MVP)と最優秀投手賞の2冠に輝いた。

軟式野球部マネジャーで「HAKUMON Chuo」学生記者の3年生、影原風音さんが優勝の喜びとともに、栄冠を勝ち取ったチームへの熱い思いを綴ります。



力強い投球を見せる牧温人投手▲

全日本の優勝、まずは選手の皆さんにおめでとうと言いたいです。今までやってきた充実した練習から、選手を信じていたものの、全国大会ということもあり、一戦一戦、ソワソワしながら見ていました。マウンドで選手が人差し指を突き上げて喜びを共有する姿を見るのが夢で、マネジャーとして、自分たちの代である光景を見られて幸せでした。1、2年生の後輩たちにも感謝の気持ちでいっぱいです。

## 直前の夏合宿で レベルアップ

夏休みに入り、8月1～6日の福島合宿では、前期試験のためのオフ期間から体力を戻すため、ランなどで追い込むメニューをこなして意識を高めました。夏休み中の週4日、

各日5時間の練習では、全日本優勝を目標に、チーム全体で意識を高めることはもちろん、ポジションごとに守備に取り組む時間や、自主練で自分の課題に向き合うメニューを設けるなど、チームと個人の双方の成長、レベルアップを図る練習になったと、マネジャーの目線からも感じました。夏空の下、積み重ねてきた選手たちの努力が報われ、今は安堵感も抱いています。

優勝したチームには、2つの特長があります。気持ちの強さと積極性です。相手に気持ちで負けないこと、勝っている状況でも慢心せず、負けていても必ず追いつくという執念を持つ。これらの点でどのチームにも負けていません。また、一人ひとりが主体的に考え、チームに足りないものを補おうとする積極性があります。どんな場面でも、負けない

という確かな信念を持ち、自分たちのプレースタイルをぶれずに冷静に貫いた姿勢が勝因の一つだったでしょう。

## 信頼厚い林主将

1～3年生の3学年がそろって初めて成り立つチームです。部員一人ひとりがチームに不可欠なメンバーであり、ベンチから声を出して盛り上げたり、スタメンのサポートをしたりと、それぞれの場所で輝いている姿に、温かな雰囲気、チームワークを感じます。

優しく穏やかな性格の選手が多い3年生。しかしプレーの精度や巧拙に関しては、時に厳しく指摘し合い、後輩へのアドバイスも的確です。オンとオフを素早く切り替え、練習と休憩のメリハリも上手に付けられ





決勝戦の二回に適時打を打ち、笑顔の上保大輝選手▲

ます。

林駿佑主将(経済3)は、チームへの貢献度の高い選手を見極めようと、連係プレーなどの面で光る活躍を見逃しません。チーム全体のことを冷静に見ているキャプテンに対するチームメイトの信頼は厚いと感じています。

2年生は人数こそ少ないものの、3年生の意見を尊重したうえで、2年生自身の考えを仲間に還元してくれるチームの柱。エースの牧温人のその日の調子を感じ取りつつ、彼を支える団結力は素晴らしく、光るプレーや、チームを鼓舞する声かけといった2年生の姿勢に励まされる3年生も多いです。

伸びしろが無限にある1年生はそんな2年生の姿を見習って成長してほしいと思っています。

## チームを支える中で 自分自身も成長

この春、チームに新しい風を吹き込んでくれた1年生は、夏合宿を経てさらに頼もしく成長しました。ポテンシャルの高い選手も多く、けがで出場できなかった3年生をフォローするなど、大会でも心強い存在でした。

私が軟式野球部マネージャーになろうと思ったきっかけは、選手が生き生きと活動している姿に心を動かされたからです。高校までプレーヤーとして空手、水泳、バレーボール、漕艇(ボート)とさまざまなスポーツを経験してきた中で、自己の成長を強く感じたのは、表舞台で活躍したとき以上に、その前の下積みや裏方としてチームメイトを支えたときでした。チームの活躍を願いながら、

仲間のそばで支えることが好きだと気づいたのです。

そして、大学ではマネージャーをやろうと決心し、入学後、軟式野球部と出会いました。グラウンドを入部体験で訪れると、厳しくも楽しそうな雰囲気練習に励む選手がいて、一人ひとりに活躍のチャンスがあると知りました。

練習のメニュー決めや普段の活動は、選手が主体となって取り決め、全員が部活動のブレンだと感じたことを覚えています。真剣に日本一を目指せる環境に身を置きたい。そして、充実した日々を過ごし、日本一を本当にならえることができました。

## 中央大学 軟式野球部メンバー

### 【投手】

渡辺 健豊 (法3)  
 上山 裕太 (文3)  
 牧 温人 (法2)  
 小牧 正宣 (法1)  
 松田 吉達 (商1)  
 小屋 權士 (文1)  
 井出 都斗 (国際経営1)

### 【捕手】

高畑 佳規 (商3)  
 上野 雄也 (総合政策1)  
 寺沼 樹 (商1)

### 【内野手】

市毛 雄大 (法3)  
 上保 大輝 (経済3)  
 守田 健太 (経済3)  
 前川 彪之介 (商3)  
 福島 諒平 (文2)  
 織田 尚 (商2)  
 立谷 俊太郎 (法1)  
 小牧 颯太 (経済1)  
 海老沼 樹喜 (経済1)  
 田中 千晴 (経済1)  
 山村 駿悟 (経済1)  
 山本 宗二郎 (経済1)

### 【外野手】

河鍋 世和 (経済3)  
 林 駿佑 (経済3) =主将  
 竹林 龍 (文3)  
 谷ヶ崎 康平 (文3)  
 高野 昇 (経済2)  
 笠井 滉矢 (経済2)  
 片倉 裕文 (法1)  
 坂口 晃一郎 (商1)

### 【マネジャー】

海保 朱里 (商3)  
 影原 風音 (文3)  
 佐々木 優衣 (経済2)  
 安部 帆波 (経済1)  
 小田部 天音 (総合政策1)  
 鈴木 富花 (経済1)





# 第46回全日本学生軟式野球選手権大会

(2023年8月26~29日、東京・八王子市 スリーポンドスタジアム八王子)

## 決勝

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計
広島修道大	0	0	0	1	2	0	0	0	0	3
中央大	1	1	0	0	2	0	1	0	X	5

## 中央大 決勝先発メンバー

打順	守備位置	名前(学部・学年)
①	センター	林 駿佑 (経済3)
②	ショート	海老沼 樹喜 (経済1)
③	レフト	竹林 龍 (文3)
④	ライト	河鍋 世和 (経済3)
⑤	ピッチャー	牧 温人 (法2)
⑥	ファースト	山村 駿悟 (経済1)
⑦	キャッチャー	高畑 佳規 (商3)
⑧	サード	上保 大輝 (経済3)
⑨	セカンド	小牧 颯太 (経済1)



## 準決勝

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計
青山学院大理工学部	0	2	0	0	0	0	0	1	0	3
中央大	2	0	0	0	0	2	0	2	X	6

## 2回戦

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計
中央大	1	0	1	0	1	2	0	0	0	5
中部学院大	1	0	0	0	2	0	0	0	0	3

## 1回戦

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	計
福岡工業大	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
中央大	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1x



(注) 記録は全日本学生軟式野球連盟公式ホームページより抜粋

# 物理学がつむいだ 貴重な経験、交流と出会い



「日本語カフェ」で知り合った友人と井關聖音さん(左)。リラックスできるひとときだ▲

## デンマーク・ コペンハーゲン大学に交換留学

いせき しおん  
井關聖音さん(理工学部物理学科3年)

### ☆コペンハーゲン大学

1479年設立。デンマークの首都、コペンハーゲン市にある同国で最も歴史のある大学。学生数は約3万7000人。文学部、法学部、理学部、社会科学部、医学・歯学・薬学部、神学部の6学部がある。ニールス・ボーア(物理学賞)をはじめ多数のノーベル賞受賞者を輩出している。

理工学部物理学科3年の井關聖音さんが、2023年2月までの約半年間、デンマークのコペンハーゲン大学に交換留学しました。学業でもプライベートでも、有意義でかけがえのない経験をした半年間を振り返ってもらいました。

私は2022年8月から2023年の2月末までの約半年間、学部2年生の後期にコペンハーゲン大学に交換留学しました。小さい頃から異文化や海外で暮らすことに興味があったことと、好きな教科である英語を使って、専攻している物理を学んでみたいという思いから、留学に行くことを決めました。

## “量子力学の育ての親”に学ぶ

留学といえば、アメリカやイギリスなどの英語圏の国への割合が比較的多いですが、留学先の大学を選ぶと調べていくうちに、協定校にもさまざまな大学があり、コペンハーゲン大学では、量子力学の育ての親であるニールス・ボーアの研究所で授業を受けられることを知りました。

留学に応募した1年生のときは、物理についてまだ基礎的な内容しか学んでいない状態でしたが、量子力学という、光子や電子といったとても小さな「量子」について勉強できる学問に最も興味をもっていたので、とても惹かれ、応募を決めました。

また幸福度が高いといわれるデンマークでの生活や、EU内で旅行がしやすいという点にも魅力を感じました。理系の学生で留学に行く人

は少数派ですが、前例の少ない中でも大学でたくさんの方が相談に乗ってくださり、無事留学に向かうことができました。

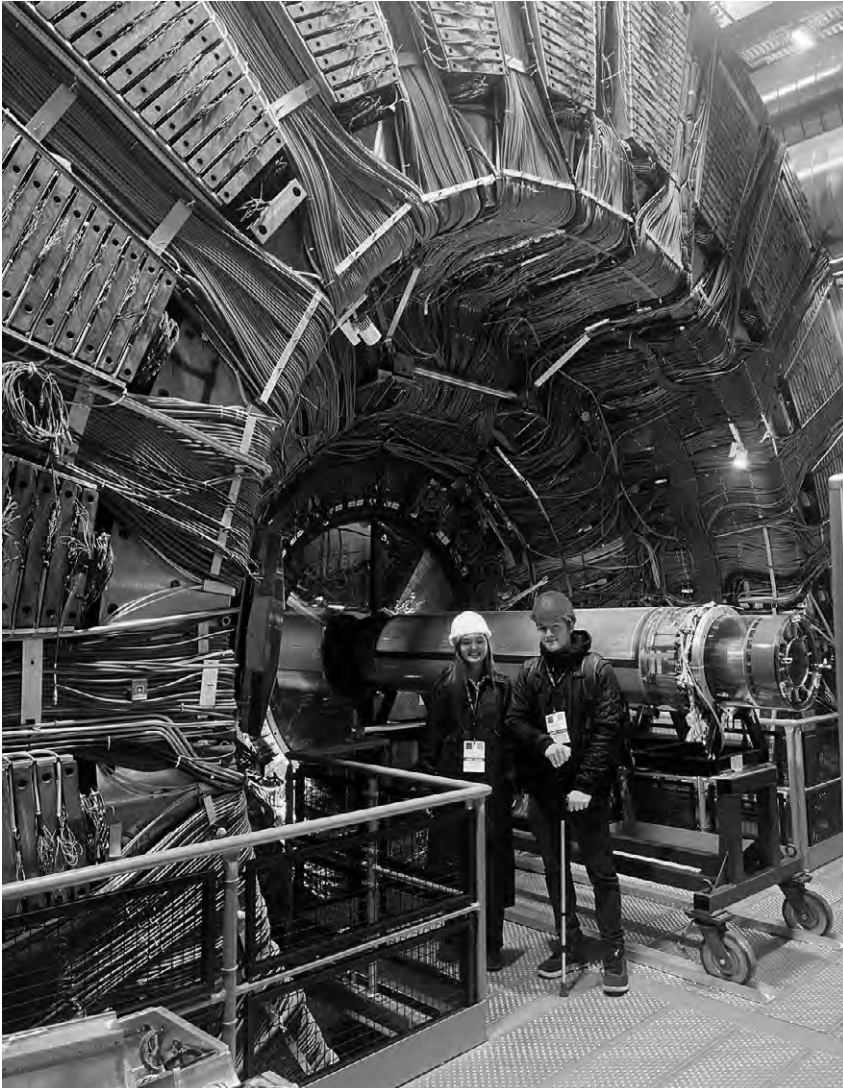
## 最先端の氷河研究を知る

留学中には、解析力学、氷河物理学、アカデミックライティングの3つの授業を受けました。その中で特に印象的だったのは、氷河の物理学の授業です。この授業は、物理学を通して仲良くなった友人から、「デンマークは氷河の研究で有名だよ」



▲コペンハーゲン大学の入学式の一コマ





CERN を見学中の井關聖音さん(左) ▲

と教えてもらったことがきっかけで、履修を決めました。

日本の物理学科ではあまりなじみがない分野でしたが、デンマークはグリーンランドにおける氷河研究で最先端の国であり、貴重な環境の中で学ぶことができました。授業では、実際にグリーンランドの氷河から採取した氷のデータを分析して、過去の気象を推測する方法を学び

ました。

先生が実際に氷河を採取する様子がわかる写真を見せてくれたり、デンマークの地形と氷河の関連性を教えてくれたりしたこともあり、有意義な授業でした。留学に行っただけの頃は、正直なところ、英語、授業内容ともにレベルが高く、絶望感を覚えました。物理を学ぶ中でできたつながりや一つの授業にじっ

くりと向き合える時間割のおかげで、だんだんと授業が楽しくなってきました。

## さまざまな人から 多くの学び

もともと私は物理を勉強したいという理由で留学しましたが、日常生活での出来事や、人との出会いからもたくさんの学びがありました。日本での準備期間は、ビザ、履修計画の策定などで本当に忙しかったですが、留学中は違いました。デンマークでは「hygge」(ヒュゲ=注)というリラックスした時間をみんなが楽しんでいて、私も自分のやりたいことに多くの時間を費やすことができました。

休みの日には、いろいろな国から来た留学生や「日本語カフェ」と呼ばれる言語交換の場で知り合った友達などと町探検、お菓子作り、パーティーを楽しんだり、優しいオーナーの下で、寿司店でのアルバイトにも挑戦しました。

また、金曜日の夕方には学校内の「フライデーバー」というバーによく参加していました。デンマークの大学では珍しくないのですが、学校内での飲酒体験はとても新鮮でした。さまざまな人と話せるチャンスでもあり、よく参加しました。デンマークはリラックスした「hygge」な瞬間がありながらも、フライデーバーや新年の大量の花火の打ち上げなど、イ

(注)「hygge」(ヒュゲ)=心地よく安心感のある楽しい雰囲気のことを表すデンマーク語。他人とでも1人でも、ゆったりと人生を味わっている感覚を示す概念という。





コペンハーゲンで有名なニューハウン (Nyhavn) の港▲

ベントの際には思い切り楽しむという一面もあり、とても面白い国だと思います。

## 世界最大の陽子衝突型 加速器にワクワク感

まとまった休みには旅行に行き、冬には留学前からの念願だった、スイスのCERN（欧州原子核研究機構）に見学へ行きました。CERNでは、LHCという地下100メートルにあり、全周27キロにもなる世界最大の陽子衝突型加速器を目の前で見学し、働いている方の話を聞くこと

ができ、物理の楽しさや「ワクワク」を感じた瞬間でした。

その他にも、友人とパリに行ってエッフェル塔を見たり、イタリア一人でバックパック旅行をして世界遺産を見たり、行く先々の国々で物理の聖地巡りをしたりと、さまざまな場所を訪れました。

留学を振り返ると、言語や授業、生活等での悩みはありながらも、デンマークという国でたくさんの人との出会い、また物理学を通して貴重な体験ができたことからとてもハッピーな毎日でした。将来また海外で物理学に携わる経験をしてみたいと

いう新しい目標もできました。

最後に、理系で留学に行く方は少ないし、英語での授業やカリキュラムなどへの不安があるかと思いますが、私は物理を勉強していたからこそできた友達、行くことができた場所など、自分の専門分野のおかげで、留学がもっと楽しくなった瞬間がたくさんあったと思っています。少しでも興味がある方は、行けたらとても楽しいので、大学や周りの人に相談してみるなど、ぜひ一步を踏み出してみてください。

謝辞 留学記投稿にあたり、英語をご担当されている松谷泰樹先生（中央大学米国交換留学第1回生）にご指導ならびにご尽力を賜りました。ここに記して謝意を表します。



「女流タイトルを取りたい」

宮澤紗希さん(法4)

「一つひとつ前へ進みたい」

内山あやさん(理工1)

## 棋道会将棋部の歴史上で 初の女流棋士 2人が在籍

棋道会将棋部の宮澤紗希さん(法4)が今年7月、プロである女流棋士(2級)となった。将棋部では、内山あやさん(理工1)が女流棋士(初段)としてすでに活躍している。女流棋士の在籍は部の歴史の中でも初という。プロの2人はアマチュアである学生の大会参加はできないが、将棋部の団体戦を応援したり、部員同士でオンラインで対局したりと、部活動にも参加している。2人に棋士としての将来像や目標、将棋の魅力などを尋ねた。

「先の先の手を読む その深さを追求する」

女流2級 宮澤紗希さん

「将棋が好き。将棋に関わることを仕事にしたい」。今年7月1日付で「プロ」と呼ばれる女流棋士になった。「私はあまり器用ではなく、将棋と学業の両立は難しい。このため

(学生の多くが進路を決める)大学4年生というこの時期にプロ入りを決意しました」と明かす。

7月以降は自身の力量を上げることとともに、ファンとの指導対局や、

棋譜の解説など将棋の普及に関係する仕事も増え始め、「少しずつ慣れてきました」と笑みをたたえて話す。普及の仕事にもやりがいを感じるという。



幼稚園年長の頃、父親に教わって将棋盤に向かうようになった。小中学生の頃は、日本将棋連盟の子供スクールや、師匠の戸辺誠七段の教室に通うなどして力を蓄えた。強くなっていく過程で「攻める将棋」を身に着け、現在は得意戦法の居飛車から、積極果敢に攻めていく将棋が持ち味だ。「受けが強いのも大事ですが、攻めずに勝つのも難しい」と語り、自らの課題として、先の先の手までを見通す「読み」の量と、深さの追求を挙げている。



## 「楽しいと思う気持ちを 忘れない」

読み進んだ先の局面を正しく判断する力も求められ、そのための経験の積み重ねも必要だ。いろいろな局面を想定し、読みのバリエーションを増やしたいと意欲をみせる。

将棋と向き合う上で常に大切にしていることがある。「将棋は楽しいと思う気持ちをいつも持つようになっています。将棋が強い人は皆、そうだと思う」と説明し、「負けるとアマチュアのときよりもつらい。でも楽しくないと思うと、研究にも実が入らない」と打ち明ける。先を読む力を

鍛え、勝つことが増えればさらに将棋が楽しくなると考えている。

将棋は複雑で、考えて勝つ喜びがある半面、一手を間違えて敗れる怖さもある。「負けず嫌いだから負ければ悔しい。それでも、指した手の責任はすべて自分自身にあるから、結果には納得できる。すべて自分の責任という要素も将棋の魅力だと思う」と語り、厳しい勝負師の一面をのぞかせた。

形勢が相手に傾いても粘り強く戦うことを常に心がけている。ライバルのように意識している女流棋士はいないが、将棋部の後輩の内山あやさんを含めた同世代の活躍は刺

激になり、負けたくないという気持ちがわくという。

「一步一步強くなり、いずれは女流のタイトルを取りたい」と未来を見据えている。

## 宮澤紗希・女流2級

みやざわ・さき。東京・広尾学園高卒、法学部4年。師匠は戸辺誠七段。8月30日のデビュー戦で勝利するなど、女流棋士としての戦績は2勝3敗(11月2日現在)。2016年度全国中学生選抜選手権女子の部で優勝し、2018年度と2019年度の全国高校選手権女子個人を連覇。2022年度は学生女流名人戦で優勝した。自身が小学生の頃、「女王」のタイトルを保持していた上田初美・女流四段があこがれであり、目標の存在。当時、サインしてもらった駒入れを大切にしまっているという。

# 「本格派の棋士を目指す」

女流初段 内山あやさん



理工学部数学科で学ぶ1年生の女流棋士。「答えが明確に出るのでわかりやすい」と、小さい頃から算数が好きで得意だったという。「数学の問題を解くときの『論理的に考えること』が、先の手を読む将棋

に通じるものがある」と話す。

将棋の魅力を尋ねたところ、少し意外な答えが返ってきた。もちろんプロの勝負師として将棋の世界と向き合っているのだが、「勝ち負けにこだわるより、(将棋の手を) 考え

ることが好き。考えることが楽しい」という。

取材中に、「勝ち負けよりも、考えることが好き」という言葉を何度か繰り返し聞いた。「何年も研究を重ねた努力が花開くときが来る。その可能性はある」と語る一方で、「将棋が好きという思いの延長線上で、プロ棋士になった。私はそんなに“壁”に当たってきたタイプではないんです」と自らを分析する。ライバルと感じている棋士もいないという。

新人の登竜門とされる「白瀧あゆみ杯」に優勝し、累積の勝ち数も増えて、プロとなったのは中央大学高校1年生のときだった。個性的な天才肌の勝負師と感じさせる独特の雰囲気をもった女流棋士だ。

## 今年度、 想定以上の勝利数

今年度の戦績は18勝10敗(11月2日現在)。「トーナメント戦で想定以上に勝って、対局数が増えている。勝って初めて力量の向上も実感できる」と手ごたえを感じている。経験を積むために必要な対局数は高校時代の倍くらいに増えたという。



将棋の面白さについて、「最善の手が何なのかは、このAI（人工知能）の時代でも解明されていない。将棋は戦法がいろいろあるのがいいと思っていて、好きな戦法を見つけるのも将棋にのめり込むきっかけになるかもしれない」と教えてくれた。対局のたびに同じ戦法を繰り返していくことが力量を上げる近道だとも。同じ将棋部の先輩、宮澤紗希さんが女流棋士の道に進んだことには、「昔から知っている間柄ですし、これからも長いお付き合いになります。

素直にうれしい」と喜ぶ。

自身は「受けの棋風」が特長だ。昔からある居飛車党で、相手の攻めをしのぐ手を間違えない将棋を得意としている。さらに飛躍するために序盤戦の知識を身に着けることを挙げ、そのためには棋譜の勉強や、実戦経験の積み重ねが大事になるという。

奇をてらった指し方をしない本格派といわれる棋士像を理想として目指している。

## 内山あや・女流初段

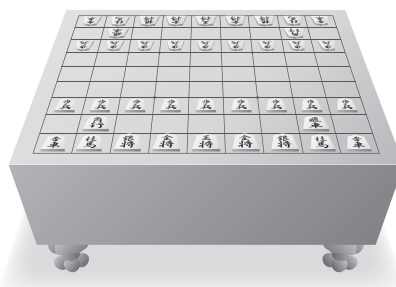
うちやま・あや。東京・中央大学高校卒、理工学部1年。師匠は北島忠雄七段。2020年9月に第14回白瀧あゆみ杯争奪新人登竜門戦で優勝、同年12月に女流棋士となった。「大きな目標を掲げるのは私には向いていないから、こつこつと対局数を増やし、クラス(段位)を一つひとつ上げていきたい」と謙虚に語る。将棋も数学も好きだから続けられるという。

「将棋が話題になることが増えた」「とにかくすごい」

## 藤井聡太八冠の存在

将棋界を超えて大きな注目を集めている藤井聡太八冠の存在について、内山あやさんは「将棋が話題になることが増え、藤井八冠のもたらした良い影響は大きい」と受け止めている。さらに「藤井八冠の存在をきっかけに、一人でも多くの人が将棋に興味を持ち、それぞれの棋士のファンとなってくれたらうれしい」と話した。

法学部の友人から時折、藤井八冠のことを尋ねられるという宮澤紗希さんは、「とにかくすごい」としか答えようがないという。「圧倒的な強さを上手に説明できない」と驚いている。



# 学修、就活、図書館、食堂… 「茗荷谷」のリアルな日常

キャンパスの都心移転 法学部生が寄稿

茗荷谷、駿河台、小石川の都心3キャンパスが今春に開校して8カ月。多摩と都心の二大キャンパスで、学修をはじめとする中大生のさまざまな活動が活発に進展しています。茗荷谷キャンパスの法学部生2人に、新しい学びの場の紹介とともに、日々の学生生活で感じていること、多摩キャンパスとの違いなど、率直な思いを寄稿してもらいました。

## 「司法試験」「教職」 目標に向かい 一層頑張れる環境に

法律学科3年 佐々木望恵さん

私は法職茗荷谷研究室に所属しており、そこでは法科大学院入試やその先の司法試験に向けた勉強をしています。また現在は教職課程も履修し、以前から興味があった教育分野について学んでいます。

多摩キャンパスに恋しい思いも…  
気分新たに楽しむ学生生活

法学部が茗荷谷に移転して早8カ月が経ちました。移



学食もお気に入りの場所です!▲



転当初は、通い慣れた多摩キャンパスが恋しいときもありましたが、現在はお気に入りの場所や生活の流れも定まってきて、気分新たに学生生活を楽しんでいます。

授業で使う教室の椅子が柔らかかったり、談話スペースが多くあったり、プリンターが多く設置されていたり、キャンパスは吹き抜け構造になっていて、フロアの反対側に友達を見つけることができたり…。紹介しきれない好きなポイントは他にもたくさんあるのですが、私の特によく利用する3つの場所をご紹介します。

多摩キャンパスではペデ下を抜けてずっと先にあった炎の塔が、入り口から近い地下2階に入り、「学生研究フロア」という名称に変わりました。炎の塔は3階建てでしたが、今は14ある学研連と法職茗荷谷研究室が全て同じ階に集まったので、別の研究室の友達とすれ違うことが格段に増えたのが個人的にうれしいところです。

友達と勉強するときには、ゼミ室の利用申請をして議論の場として使うことができます。ゼミ室には壁3面にホワイトボードが付いていて、そこに議論をまとめることで、

よく整理できると感じます。

## ハリーポッターの雰囲気のある食堂 茗荷谷独自「教職課程」の授業も

地下1階の食堂は、映画の「ハリーポッター」のような感じがする、照明がすこし暗くて不思議な雰囲気のある場所です。お昼時は混んでいるのであまり行かないのですが、学食は温かくておいしくて、とても好きです。特にスエヒロカレーがおすすめです。

4階にある図書館もお気に入りの場所です。研究室での勉強が行き詰まったら気分転換のために訪れます。教職課程で行う模擬授業の準備のための資料も、私の興味のある児童心理についての本も、レポートを書くときに閲覧するような法律文書は特に多くそろっているのです。よく借りています。空いている本棚もまだたくさんあって、これから蔵書はさらに増えていくと思いますので、とても楽しみです！

さて、教職課程につきまして、茗荷谷でも教師を目指すことは十分可能だと思います。教職課程独自の授業も茗荷谷キャンパスで開講されています。茗荷谷には法学部生しかいないため教職を目指す学生同士の交流こそ多くはないですが、多摩にある教職事務室の職員の方が定期的に「学生ハブ」(学内のさまざまなサービスを学生にワンストップで提供する相談・手続きの窓口)に来て、困ったときには相談に乗ってください。

教職と法職の両立は私にとって目まぐるしく、基本的に大学には毎日来て、作業や勉強などを行っています。都心に移転して通学時間が短くなったのは毎日通える大きな理由です。また、研究室には自分の定席があって、そこに行けば友達に必ず会えるので、先輩に勉強を教えてもらったり、雑談をしたりと楽しく過ごしています。



▲地下2階の談話スペースで先輩に勉強を教えてもらっている佐々木望恵さん(左)。  
くつろいだ雰囲気だ=茗荷谷キャンパス

移転後も引き続き、法職事務室や教職事務室をはじめ、さまざまなサポートがあって、一層自分の目標に向かって頑張れる環境になったと強く感じています。

充実した環境で学修できているという佐々木望恵さん▶



# 4年生、今も「多摩」居住 就活では 「都心に引っ越していたら」 と思うことも

国際企業関係法学科4年  
「HAKUMON Chuo」学生記者  
芳賀葵さん

入学時は、4年生になるとき茗荷谷キャンパスの近くに引っ越し予定でいました。しかし、引っ越しの手間と、4年次はあまり通学しないだろうということ、1カ月は教育実習で実家に帰省することなどを考慮した結果、引っ越しを取りやめました。

法学部生ですが、文学や教育学の授業が好きな私は、他学部履修制度を活用して多摩キャンパスで文学部の授業を受けたかったという理由もあります。図書館の蔵書数は、多摩キャンパスも充実していて魅力的なので、よく多摩の図書館で本を読んでいることが多いです。







## 「オンライン」を駆使した就活 スチューデントハブも活用

実のところ、私の周りの4年生も、引っ越しをしていない友達が少なくありません。今でも多摩キャンパス近くに住んでいる友達同士で集まって楽しく過ごしています。近所に友達が大量にいる環境は、卒業後はなかなかあり得ないと思うので、貴重な時間を大切にしながら、残りの学生生活を送りたいと思っています。

4年生になり、前期は茗荷谷キャンパスと多摩キャンパスにそれぞれ週1回ずつ通う予定にしていたのですが、6月末まで就活を続けて、面接の予定が入ることが多く、満足に通学できませんでした。就活への取り組みに、先生方が理解を示してくださり、ご配慮いただけたことは大変助かりました。

就活は基本的に都心で面接があり、1時間以上をかけて向かうことが多かったです。「茗荷谷キャンパス近くに引っ越していれば」と感じたのも確かです。ただ、コロナ禍のオンライン面接の導入で就活の形態が変わり、午前中にオンライン面接、午後から通学ということも可能になりました。

対面面接を受けてから通学できるというのも、都心

キャンパスだからこそそのメリットでした。午前中に対面で面接を受け、その後、茗荷谷キャンパスでオンライン面接を受けたこともありました。多い日は3件のオンライン面接を受けましたが、オンラインはこれからもなくなってほしくないと感じます。

茗荷谷キャンパスのスチューデントハブに、オンライン面接を受けられる個室ブースがあるので、そこを利用していました。

## 屋上庭園で一息 都心観光も楽しめます！

茗荷谷キャンパスは多摩キャンパスに比べて、圧倒的にコンパクトです。大学というよりも専門学校やビルといった印象を受けます。地下2階は炎の塔（現在の名称は学生研究フロア）の学生だけが入れるフロアで私は行けないのですが、どんな雰囲気なのかちょっと気になります。周囲に緑が少ない茗荷谷キャンパスですが、5階には屋上庭園があります。一息つきたいとき、屋上庭園でゆったりとした気分になることができます。

基本的にキャンパスに法学部生しかいないというのも考えようによってはメリットかもしれません。出会う人に授業のことを聞いたりしやすいです。学食は1回しか利用したことがないのですが、後輩に聞くと、混雑で座れないことがあるそうで、何とか改善してほしいと思っています。また、現金は使えずキャッシュレス決済です。

キャンパス移転のデメリットはあまり思い浮かびません。強いていえば、学友会体育連盟の部活動をしている友達が、「授業は茗荷谷キャンパス、部活は多摩キャンパスで、移動の時間を考えて履修を組まないといけなし。移動時間もかかる」と悩んでいたことや、キャンパスごとに活動するのか、複数キャンパスにまたがって合同で活動するのかなど、サークルの今後の活動形態が気になります。

4年生の後期は、茗荷谷キャンパスでゼミと教職の授業を履修しています。週2回、茗荷谷に通っているのですが、大学に行くついでに、都心の観光を楽しんでいます。田舎から上京した私にとっては、東京（都心）の何もかもが新鮮で面白いです。